

甘蔗品種 CP 29/116, CP 36/105, CP 44/101 について

大内山茂樹・中島 治己・塘 二郎
酒匂三千夫・坂元 茂
九州農業試験場

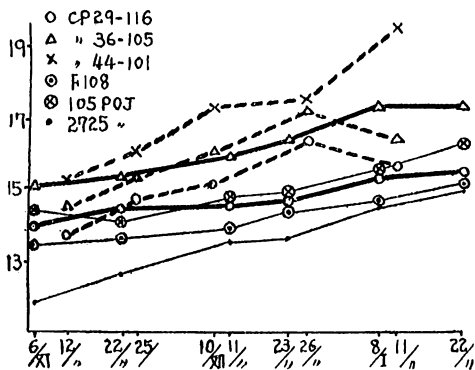
OUCHIYAMA, S., NAKASHIMA, H., TOMO, J., SAKO, M.
& SAKAMOTO, S. ; On the Variety of Sugar-
Cane CP 29/116, CP36/105 & CP 44/101

CP 29/116, CP 36/105, CP 44/101 の3品種は Florida の Canal Point で育成され、わが国へは1950年4月山崎守正博士により導入されたが、最近当業者の栽培希望も多く、一部普及されつつある現状であるので3品種の特性を記し参考に供する。試験遂行にあたり協力された鎌田次男技官及び芝亨氏に対し謝意を表する次第である。

新植の成績

1952年4月14日、3尺×1尺に全茎苗の2節苗を植付け肥料は反当 N, P₂O₅, K₂O を夫々3, 2, 2貫宛施し、1区2坪の4回反覆とした。6月中旬 CP

第1図 糖度 (Brix)



実線：新植，点線：株出

44に白条病が発生し同品種は試験より除外し、2月9日収穫した結果は第1表の通りである。

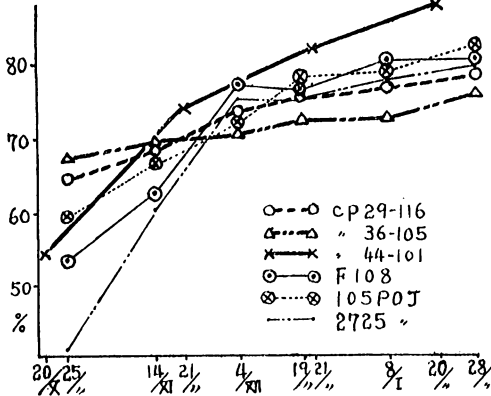
糖度の上昇経過は第1図の如く CP36 は11月初めにおいて既に従来品種の収穫期における糖度より稍高く、また登熟試験で得られた純糖率は第2図の如く早期から比較的高く早期製糖の可能性を示している。

第1表 新植の収穫調査 (1952—3年)

品 種	区分	原料 葉長	節数	平均 葉径	平均 糖度	1区 当葉 数	反当 収量
CP29	主	cm 196	13.9	cm 2.7	15.3	本	千斤
—116	分	185	11.4	2.6	15.0	61.0	15.69
CP36	主	195	14.0	2.5	16.2		
—105	分	180	11.0	2.2	16.1	67.3	14.78
105	主	168	16.3	2.4	15.5		
POJ	分	—	—	—	—	51.0	9.51
F	主	161	11.7	2.8	14.7		
108	分	151	9.5	2.6	14.5	45.5	11.78
2725	主	165	11.5	3.1	14.0		
POJ	分	150	10.3	2.9	13.8	61.3	16.79
F 價	主	** 27.5	** 42.4	** 52.2	** 14.3	** 13.4	** 29.4
	分	* 5.7		* 0.6	* 8.9		

(註) 主：主茎，分：分けつ茎

第2図 純糖率 (1952—3 年期)



(註) CP 44/101 のみは 1953—4 年期

1952 年は近年稀な豊作年であつたが、気象条件のやや不良であつた 1953 年西之表町、中種子町で試験した結果は第 2 表の通りであつた。

第 2 表 1953—4 年期新植の収量

場 所	西之表町(水田)		中種子町(畑地)	
	1954. 1. 18		1953. 12. 11	
区 分	反当収量	糖 度	反当収量	糖 度
CP 29—116	斤 13,453	15.4	斤 17,704	14.2
CP 36—105	12,202	14.3	13,553	16.3
F 108	9,552	14.0	11,152	12.8
2725POJ	—	—	9,752	11.9
澁 谷 山	6,901	13.9	—	—
F 價	** 6.10	** 10.7	** 10.45	** 9.8

また 1953 年植付時期試験を遂行中 9 月 14 日台風 13 号 (最大風速 10.8 m/Sec) が襲来し CP 29, 36, 44 夫々平均 0.3, 10.7, 11.5 % の折損葉を生じ風には比較的弱い事が判明した。

株 出 の 成 績

新植の品種比較試験の後を 3 月 15 日芽出した外の試験操作は新植の場合と同一である。1953 年 1—2 月の気温は平年より低く従来の品種の発芽は極めて悪かつた。2 月 22 日収穫した結果及び糖度の上昇経過は第 3 表並びに第 1 図の通りで CP 品種は比較的不良な気象条件下でもよく多収穫をあげ得るのではないかと思われる。

第 3 表 株田の収穫調査 (1953—4 年期)

品 種	発 芽 率	原 料 茎 長	節 数	平均 茎 径	平均 糖 度	1 区 当 茎 数	反 当 収 量
CP 29	% 93.7	cm 183	13.7	cm 2.6	16.4	本 72.5	千 斤 18.31
” 36	100.0	192	13.8	2.3	16.3	99.5	22.43
” 44	54.2	172	12.7	2.6	17.9	62.0	13.14
105	31.3	139	15.7	2.5	17.9	11.8	2.31
F 108	56.3	112	9.6	2.6	16.4	32.0	4.98
2725	25.0	114	9.8	2.9	15.6	16.5	3.00
F 價	** 20.4	** 22.3	** 20.3	** 10.9	** 2.2	** 5.6	** 52.0

考 察

CP 品種は茎長く、分蘖茎も多いが所謂中茎種に属するため気象条件に恵まれた年は従来の品種中最も収量の多い 2725 P O J より若干劣るが、比較的不良な気象条件下では遙かに優れ、この傾向は株出した場合、萌芽力の旺盛な事と相まつて更に強調され画期的収量も期待出来ると考える。またこれら 3 品種特に CP 36 44 は糖度、純糖率の上昇早く極早期の製糖が可能である。しかし CP 44 は耐病、耐風性弱く今後の普及は考えられない。今後、早熟多収の CP 29, 36 を適当に取入れる事は蔗作安定の上から極めて重要な事と考える。また CP 品種は冬期でもよく生長を続けるので夏、秋植も可能と思われ、現在これらに関しては試験中である。